いわき 発掘ニュース 第86号

「令和6年度発掘速報展」開催

平城跡第 38 次調査の全景　手前の黒色の部分が内堀跡、奥の重機がいる場所が外堀跡となる。

令和６年度は、発掘調査３遺跡５件、試掘・確認調査 14 遺跡 17 件について実施しました。また、整理等作業を行い埋蔵文化財調査報告書３冊を刊行しました。

今回の速報展は、発掘調査を実施した平城跡（近世・近代）・古身遺跡（縄文時代・弥生時代・近世）・砂畑遺跡（奈良時代・平安時代・近世）を中心に、埋蔵文化財調査報告書を刊行した平城跡第 24・25・31・32 次調査・塗師櫓石垣の調査成果を展示します。

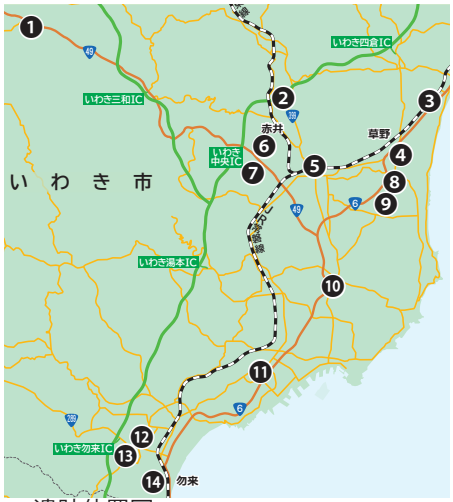
主な発掘調査業務（試掘・確認調査含む）

① 下市萱遺跡（三和町下市萱）▼
② 下小川台遺跡（小川町下小川）▼
③ 仁井田内城跡（四倉町下仁井田）▼
④ 赤沼館跡（平下神谷）▼
⑤ 平城跡　（平字柳町　他５地点）●▼
⑥ 小谷作広畑遺跡（好間町小谷作）▼
⑦ 好間条里跡（好間町中好間）▼
⑧ 荒田目条里跡（平荒田目）▼
⑨ 砂畑遺跡（平菅波）●▼
⑩ 米田条里跡（鹿島町米田）▼
⑪ 御前田Ｄ遺跡（泉町滝尻）▼
⑫ 館ノ内遺跡（勿来町大高）▼
⑬ 万谷遺跡（勿来町窪田）▼
⑭ 古身遺跡（勿来町四沢）●

●…発掘調査
▼…試掘・確認調査

整理、報告書作成・刊行業務

⑤ 平 城 跡（平並木の杜　他１地点）



遺跡位置図

発掘調査　平城跡　第 37 次調査

第 37 次調査は、都市計画道路搔槌小路幕ノ内線道路改良工事に伴い、令和 6 年 5 月から 7 月にかけて実施しました。令和 5 年度の第 34 次調査からの継続調査で、第 34 次調査範囲に南隣する区画の調査を行いました。

調査の結果、第 34 次調査で確認された磐城平城の堀跡の延長 28 mが確認されました。幅 5 m以上、深さは 1.3 mを測ります。堀岸には厚さ 18㎝ほどの盛土が行われていました。

盛土の下からは河川跡が確認されました。調査範囲周辺は、磐城平城が築城される以前は沖積平野であり、築城時に盛土によって城下町が整備されたことがわかりました。

調査区南端では、堀の補修工事または付け替えと推定される盛土も確認されています。

出土遺物は、江戸時代のほか、明治時代から昭和時代の陶磁器が中心に出土しています。

南北に延びる磐城平城の堀跡

盛土の下から確認された河川跡

発掘調査　平城跡　第 38 次調査

第 38 次調査は、いわき駅北口再開発に伴って実施しました。調査範囲は、磐城平城本丸東側の低地で、旧平駅の操車場として利用されていた場所です。

調査の結果、裏門曲輪を囲む内堀跡、さらに東側を南北に延びる外堀跡が確認されました。堀跡からは 17 ～ 19 世紀の遺物が層位的に出土したほか、明治時代に大量の凝灰岩礫で埋め戻された状況もわかってきました。

明治 30 年 2 月には、日本鉄道株式会社磐城線が開通し、平駅（現いわき駅）が開業しています。調査では、建物の基礎として打ち込んだ杭列のほか、上下水道施設やレンガ造りの貯水槽など、当時の遺構や遺物が確認されました。昭和時代初期には、石炭ガラで整地した敷地に転車台のある操車場がつくられたこともわかりました。

今回の調査では、磐城平城築城から廃城までの状況だけではなく、旧平駅関連の遺構や遺物から、いわき市域の近代化の一端を知ることができました。

平市街に向かって延びる磐城平城の外堀跡

旧平駅のレンガ造りの貯水槽調査風景

発掘調査　平城跡　第 39 次調査

白蛇堀南端（右側が堀内部）

白蛇堀内部に崩落した石垣

第 39 次調査は、中心市街活性化広場公園整備事業に伴い、階段設置範囲内の 103㎡を対象に令和６年７月から 10 月にかけて実施しました。調査地点は磐城平城の白蛇堀南端部にあたります。

調査の結果、白蛇堀の端部６ｍが確認されました。幅 7.5 ｍ、深さ 1.5 ｍを測ります。排水施設は設けられておらず、満水になった際にあふれた水を内堀へ流していたとみられます。

堀の内部からは崩落した石垣が確認されました。石材は高さ 40㎝、幅 60㎝、奥行き 70㎝程に成形された凝灰岩が利用されていました。出土した石材の状況から、石垣は７段以上積まれていたと推定されます。

非常に良好に遺構が残っており、絵図には詳細に描かれることが少ない白蛇堀端部の状況や、現在は残っていない絵図にみられる本丸の石垣の発見など、成果の大きい調査となりました。

発掘調査　砂畑遺跡

「田」と書かれた墨書土器

近世の磁器（左）と陶器（右）

新屋敷・南作線改良工事に伴い、令和６年 10 月から令和７年１月にかけて実施しました。

調査の結果、古代・中世・近世の掘立柱建物跡が確認されました。古代が３棟、中世が２棟、近世が１棟となります。古代の建物跡は、隣接地の国道６号常磐バイパス工事に伴う調査で確認された建物群との関連性が考えられます。また、調査範囲は新屋敷館跡の範囲内でもあり、館に伴う大型の溝跡２条が確認されました。この溝跡は現在の土地区画のもととなっていると考えられ、調査区周辺は中世の地割が残っていると推定されます。

出土遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器などが出土しています。土師器には「田」と書かれた墨書土器がありました。また、中世に位置づけられる磁器には中国製のものがあり、当時の有力者が暮らしていたことがうかがえます。

発掘調査　古身遺跡

国道６号勿来バイパス工事に伴い、令和６年６月から12月にかけて実施しました。前年度発掘した北作（きたさく）Ｂ遺跡の西側裾部の谷地（やち）（水田）が調査対象で、Ａ区とＢ区の２地点に分かれています。

Ａ区では、近世の水田面、古代以降の水田面、弥生時代の河川跡が確認され、それぞれの面からは、16世紀末葉～18世紀後半の陶磁器（肥前・瀬戸美濃・大堀相馬など）や煙管（きせる）・寛永通寶（かんえいつうほう）、古墳時代の須恵器、弥生土器などが出土しています。

Ｂ区では、近代・近世・古代以降の水田面のほか、縄文から古代にかけての河川跡が確認されました。最大の河川跡は、弥生時代のもので幅約９ｍ、深さ約２ｍの規模でした。それぞれの面から、近世から近代の肥前や瀬戸美濃、大堀相馬などの陶磁器のほか、平安時代の土師器（はじきかめ）甕、弥生時代後期後半の壺、縄文時代晩期後半の深鉢などが出土しています。この谷地が3,000年以上前から利用されていたことがわかりました。

縄文土器の出土状況（Ｂ区）

弥生時代の河川跡の断面（Ｂ区）

報告書刊行　平城跡　第24・25・31・32次調査

第24・25・31・32次調査は、令和４・５年度に、いわき駅並木通り地区第一種市街地再開発事業に伴い実施しました。調査地点はJRいわき駅の南西に位置し、磐城平城下の田町曲輪（たまちぐるわ）にあたります。

調査の結果、古代から近代にかけての遺構・遺物が重層的に確認されました。遺構は、明治時代初期の平・磐前（いわさき）県庁、磐城郡役所の基礎構造、江戸時代の磐城平城に伴う屋敷跡、戦国時代の岩城氏に関わる屋敷跡、古代の水田跡などがあります。遺物は、中世から近代までの国産陶磁器・中国産磁器・かわらけなどの土器、漆器や下駄を中心とする木製品、銭貨などが多く出土しています。

いわき市内全体に目をむけても、古代から近代までを文化面ごとに調査した例は極めて少なく、磐城平城の築城前から廃城、そして現在の街並みができるまでの歴史を知る上で、非常に重要な発見となりました。

第31次調査出土の陶磁器とかわらけ

「いわき発掘ニュース」第86号
令和７年４月19日発行

公益財団法人いわき市教育文化事業団
福島県いわき市常磐藤原町手這５０－１
TEL ０２４６－６８－６７７５